

## 学びや成長を実感し、自己肯定感を高める学級・授業づくり —ポートフォリオによる継続的な自己理解を通して—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域  
黒田 有哉

### I はじめに

連携協力校での1年半のサポーター活動と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱや2週間の教師力向上実習Ⅲを通して、教科指導や学級経営、生徒指導など様々なことを実践的に学ぶことができた。

本稿では教職大学院での2年間の学修や「**学びや成長を実感し、自己肯定感を高める学級・授業づくり—ポートフォリオによる継続的な自己理解を通して—**」をテーマとした実践から得られた成果と課題について述べるものとする。

### II 研究主題設定の理由

#### 1 全国学力・学習度調査から

平成25年度の全国学力・学習度調査によると「自分には、よいところがあると思いますか」、という問いに対して24%の児童が、どちらかという当てはまらない・当てはまらないといった否定傾向の考え方をもっていることが分かっている。

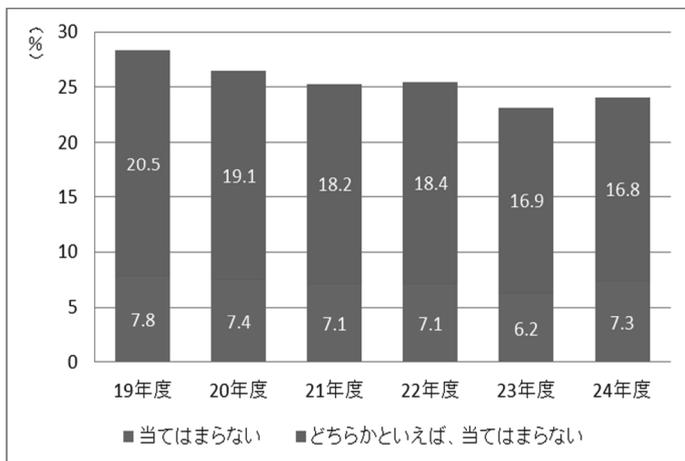
#### 全国学力学習度調査（平成25年度）

- 1：当てはまる
- 2：どちらかといえば当てはまる
- 3：どちらかといえば当てはまらない
- 4：当てはまらない

#### 【自分にはよいところがあるとおもいますか】

1	2	3	4
34.6	41.2	16.8	7.3

同質問の平成19年度からの調査の3と4の回答結果の推移を見てみると、減少傾向にはあるものの依然として25%近い数値を残している。



【図1「自分にはよいところがあるか」の回答の推移】

また、平成25年度の学力学習度調査では、自己肯定感に関する質問項目として新たに「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」「自分の行動や発言に自信を持っていますか」の2つが追加されているが、どちらかという当てはまらない・当てはまらないと回答する児童が前者は50.4%、後者は43.8%と否定傾向の考えの児童が半数近くいることが分かっている。

そのような自己肯定感の低さは授業や学校に対する意欲の低下だけではなく、いじめや不登校などの様々な教育問題の要因のひとつであったり、自己肯定感が低いまま成人・青年期を迎えることで鬱や無気力状態になってしまったり、ということが考えられている。このことから、自分自身を見つめ直し、自己肯定感を高め、成長する中で経験する様々なつまずきから立ち直る逞しさや逆境に負けない強さを育んでいくことが今日の教育的課題の一つである。

#### 2 実習校の児童の実態から

2012年9月より連携協力校であるS小学校で週2回のサポーター活動を実施してきた。昨年度は1年生、今年度は5年生を中心に担当し、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱは5年生の学級に入り実習を行った。

サポーター活動を通して見えてきた児童の課題は今回のテーマである「自己肯定感の低さ」であった。連携協力校の児童は、全体的に雰囲気は明るく元気な児童は多く、学年に関係なく休み時間になるとほとんどの児童が外に出て遊んでいる姿が見られた。

だが、授業中の様子を見てみると、授業に対する意欲が見られない児童が多く、特に授業中の発問に対する発言や挙手の少なさや、同じ児童が何度も挙手や発言を繰り返している姿が目立つ。それらは学年に関わらず見られた姿ではあるが、特に高学年になるほどその傾向が強いように感じた。しかし、授業中に机間指導を行い、児童のノートやワークシートを確認すると、正しい答えや自分の考えを記述できているにもかかわらず、挙手や発言に難色を示している児童が非常に多いということが分かった。そこから考えられることは、自分自身の考えた内容に対して自信をもつことができていないということである。

また、自分自身に対する自信の無さだけではなく、勉強や運動など様々な場面で、自分よりできる人ばかり比較をしてしまい必要以上に劣等感を感じてしまっている児童が多いということも分かった。

これらの児童の実態から、授業を通して、自己理解を促し、自分自身の持っている力や自分自身の成長に目を向けさせることで、自己肯定感を高め、自信をもたせていくことの必要性を強く感じた。

### Ⅲ 研究主題について

#### 自己肯定感について

自己肯定感については、現在様々な視点から定義がされているが、本研究においては、田中道弘が 2008 年に定義した「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」を基とする<sup>1)</sup>。

前述したように、連携協力校の児童はそれぞれが力をもっているにもかかわらず、それを自分自身が認めていなかったり、周囲と比べすぎて、自分自身のもつ力を前向きにとらえたりすることができていない。

そのため、本研究では、自己理解の観点から自己肯定感を高めるために自分自身のもつ力や自分自身の成長に「気付く」ための手立てを中心に考え実践を行った。

#### ポートフォリオ評価について

児童のもつ力や成長を児童自身に気付かせるために本研究で行った実践が「ポートフォリオ評価」の活用である。ポートフォリオとは書類入れや折りかばん、書類入れを意味する言葉である。学校現場での活用方法としては、ひとつひとつのものがバラバラにならないようまとめて綴ることによる「情報の一元化」が考えられている。そのようにして積み重ね一元化された情報を振り返らせたりフィードバックをさせたりすることで、自身のもつ力や変容や、これまででは気づくことができなかった自分自身のことについて考える機会を設けることとなり、自己理解を促進していくためには非常に効果的な手法であると考えた。

本研究で行った教師力向上実習Ⅰでは学級活動や道徳の時間を通して、鈴木敏江、岩堀美雪が提唱している「パーソナルポートフォリオ」の活用を、教師力向上実習Ⅱでは教科活動の時間を通して、堀哲夫の提唱する「一枚ポートフォリオ評価」の活用を軸にした実践を行った。

### Ⅳ 研究の構想（教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ）

#### 1 研究のねらい

- ・ 学級活動・道徳・教科活動の時間を中心として、児童それぞれのもつ力や自分自身の成長について気づき、それを受け入れることができる児童を育てる。
- ・ 自分自身の良さだけでなく、周囲の友だちのもつ力や良さについても同様に考えることができる児童を育てる。

#### 2 目指す児童の姿

- ・ 自分自身のもつ良さに気づき、様々な活動に対し前向きに取り組むことができる児童。

- ・ 自分以外の人に対しても目を向け、良さに気づき、自身の成長のために生かすことができる児童。
- ・ 自己理解・他者理解を行うために、自分の考えや思いを表現できる児童。

### 3 研究の仮説

連携協力校の実態を踏まえて、本研究では、以下の仮説を設定した。

#### 【仮説】

ポートフォリオによる継続的な自己理解を通して、児童が自分のもつ力や自身の成長に気づくことができれば、自己肯定感や自信をたかめることができるであろう。

### 4 具体的な手立て

連携協力校である S 小学校で行った教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでは、「学びや成長を実感し、自己肯定感を高める学級・授業づくり—ポートフォリオによる継続的な自己理解を通して—」のテーマの基で、『パーソナルポートフォリオ』と『一枚ポートフォリオ評価』の 2 つの実践を行った。

#### パーソナルポートフォリオ（教師力向上実習Ⅰ）

パーソナルポートフォリオは鈴木敏江や岩堀美雪が提唱している個人評価のためのツールである。岩堀美雪は自身の著書において、「パーソナルポートフォリオとは、自分の中のプラスを探し、それに関するさまざまなもの（自分の大切なもの）をファイルにしたもの」と記している<sup>2)</sup>。本研究においても、これまでの先行実践を参考にして、学級活動や道徳の時間で使用したプリントやシートをクリアファイルに綴り、自分だけのポートフォリオを作成していく。

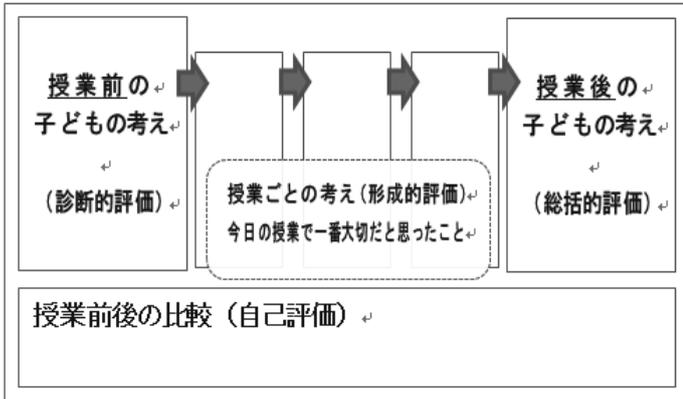
そして、その作成の過程や作成してでき上がったものを振り返る活動を通して、自分自身について客観的に理解し、前向きに取り組んでいけるような姿勢を育てていく。

#### 一枚ポートフォリオ評価（教師力向上実習Ⅱ）

一枚ポートフォリオ評価は堀哲夫が提唱している児童の評価のツールである。堀哲夫は、自身の著書において「一枚ポートフォリオ評価とは教師のねらいとする学習の成果を、学習者が 1 枚のシートの中に学習前・中・後の学習履歴として記録し、それを自己評価させる方法をいう。学習による変容を学習者自身が具体的内容を通して可視的かつ構造化された形で自覚できるので、その変容から学ぶ意味を感じ取ることができる。また、教師はそれを見て、授業評価に活用することができるという利点がある。」と記している<sup>3)</sup>。

学習前・中・後でそれぞれ診断的評価・形成的評価・総括的評価を行い、単元を通じた学習終了時に学習の

全体構造が把握できるような一枚のシートを作成する。そして、授業の効率的な振り返りをさせるだけでなく、単元を通した自分自身の成長を実感させ、学習に対する自信をもって臨んでいけるような姿勢を育てていく。また、自己評価を振り返る活動を通して、メタ認知能力を高め、自分自身で学び考える力を高めていく。



【図2 一枚ポートフォリオの概要】

### 5 研究の構想

自己肯定感を高めるための手立てとして、私は「自己理解」「他者理解」「自己受容」「メタ認知」「書く力の向上」の5つの過程が必要であると考えた。それらの5つの過程について以下の手立てを考え実践を行った。

#### 自己理解

第一の段階として、自分自身について改めて考える機会を設ける。また、最初の自己理解については、実践を終えた自分自身の変容を知るための指標としても活用する。本研究では、ポートフォリオを通して継続的に学びや成長を実感させる活動を通して、自己肯定感の向上を図っていく。（【図3 研究構想図】では、便宜的に自己理解①②と表現）

#### 他者理解

学級の児童の様子から、自分のことより周囲の人のことの方がよく観察できているという実態が見られたため、まずは周囲の人の良さを理解し、人の良さを見つけることの大切さについて考えていく。

#### 自己受容

継続的な活動の最終段階として、気づくことができた自分自身の良さや変化を受け入れ、それらを前向きにとらえることができるようにしていく。

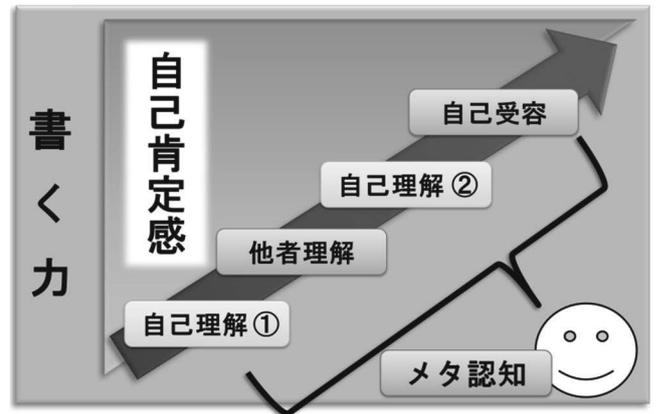
#### メタ認知

ポートフォリオで綴った資料を効果的に活用するため、ポートフォリオを使った授業の中で、活動前と活動後及び一元化された情報全体を振り返って、それにより自分がどのように変わったか、自分自身の変容に

ついてどのように思ったか、これからさらにどうしていきたいか、などを考える時間を設けていく。そういった自己評価をさせることで、自分自身について客観的に把握し認識するメタ認知能力を育てていく。

#### 書く力の向上

「自己理解」「他者理解」「自己受容」のいずれの活動においても、書く活動を通して、自分が頭の中で考えていることを表現していかなくてはならない。より多くの児童の自己肯定感を高めていくためにも、書く力の低い児童でも表現できるような工夫や、児童の書く力を高めていけるような工夫を考えていく。



【図3 研究構想図】

### V 実践の内容と考察

本稿で設定したテーマについて、実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおいて実践を行った。以下、それぞれの実践の内容をまとめ、考察する。

#### 1 教師力向上実習Ⅰ

##### (1) 実習のテーマ

それぞれの良さに気づける学級づくり  
～パーソナルポートフォリオの活用を通して～

##### (2) 実践のねらい・目指す児童像

教師力向上実習Ⅰでは、自分自身のよいところ気づかせ自己肯定感の向上を図ることをねらいとした実践を行った。また、自分以外の周囲の友だちと関わる機会を設けることで、自分自身を認めるだけでなく、互いを認め合えることの大切さに気づかせていける学級づくりをめざす。

##### (3) 手立て

#### 手立て① 目標・テーマの設定（第1時）

パーソナルポートフォリオは長期的に継続して行い、その内容を振り返ることで、自分自身で変化を感じることが大切となる。そのため、本実践を行うにあたっては、第一段階として、パーソナルポートフォリオの目的を児童に正確に理解させ、どのようなものをフアイリングすべきか考えさせる活動を行う。また、それと同時に、自分自身で何か長期的な目標を設定させる。

## 実践のねらい

これからの活動内容を明確にし、見通しをもたせることで、より効果的、効率的に次時以降の活動を行うことができる。また、目標を設定しこれからの活動が自分の夢や目標につながっていくことを押さえることで、児童の自主的に活動する意欲を高めていく。

### 手立て② 自分の良いところを考える (第2時)

本実践の第二段階として、「自分の良いところを10個書く」という実践を行っていく。また、授業の最後に本時の活動の感想を書かせ、パーソナルポートフォリオにはさむことで、振り返りを行う際のひとつの基準とする。

## 実践のねらい

頭で考えるだけではなく、ワークシートに記入し、言葉として表現することで、可視的に分かりやすく振り返ることができ、自分自身のよいところを見つめ、それをもっと伸ばしていきたいという気持ちを高めさせていく。

### 手立て③ 自己紹介 (第3時)

ポートフォリオがどのようなものであるかを子どもたちに理解させるため、自分にとって大切なもの・自分らしさを表しているものを綴っていく。

そうして綴ったものを基として、学級での交流の第一段階として、パーソナルポートフォリオを活用した自己紹介を行う。

## 実践のねらい

「自分自身のプラスの部分」を軸とすることで、楽しく自己紹介を行うことができ、また聞く側も実際に資料を見ながら話を聞くことで、質問をしやすい環境をつくり、効果的に自己紹介を行わせる。自己紹介を、まとめさせることで自分自身について改めて考える機会にさせ、自己理解を促していく。また、実際に自己紹介を行うことで、他の児童の良さや魅力についても目を向けさせ、次時に行う「他己紹介」を行うための土台を築いていく。

### 手立て④ 他己紹介ビンゴ (第4・5時)

児童同士の交流の第二段階として、互いを認め合うことを目的として「友達の良いところを見つける」活動を「他己紹介」を通して行う。

## 実践のねらい

ビンゴ形式で活動を展開していくことで、楽しみながら友だちの良さを見つけることの大切さや、友だちから認められることを通して、自分では気づけなかった自分自身の良さを発見させていく。

### 手立て⑤ 自分の良いところを考える (第6時)

朝のSTの時間を使用し、第2時に行った「自分の良いところを10個書く」と同様の活動を行い、これまでの学習内容の振り返りを行う。

## 実践のねらい

自分自身の良さについて再度考えさせることで、こ

れまでの学習を通して、新しい自分の良さをどれだけ発見することができたかを実感させる。

## (4) 実践の流れ

本実習では、以上の5つの手立ての実践のため、次の様な活動計画のもとで授業実践を行った。

【表1 教師力向上実習Ⅰ 活動計画】

時	教科	活動内容	ねらい
1	学級活動	○ パーソナルポートフォリオの説明 ○ 夢・目標の設定 (手立て①)	活動内容の理解
2	道徳	○ 自分の良いところを考える。 (手立て②)	自己理解
3	学級活動	○ 自己紹介 (手立て③)	自己理解 他者理解
4	学級活動	○ 他己紹介の準備 (手立て④)	他者理解
5	学級活動	○ 他己紹介ビンゴ (手立て④)	自己理解
6	ST	○ 自分の良いところを考える。 (手立て⑤)	自己理解 自己受容

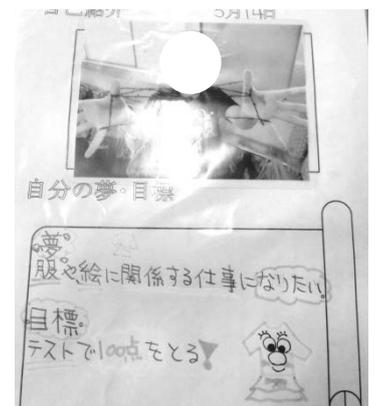
## (5) 研究の検証方法

第2時と第6時に行った「自分の良いところを10個書く」の記述内容を比較して、より多く自分の良いところを書くことができたか、あるいはより具体的に書くことができたかを検証の基準として考え、本実践を通して、どれだけ自分の良いところに気づくことができたかを検証していく。

## (6) 児童の様子及び成果と課題

### ① 目標・テーマの設定(第1時)

どの児童も自分の目標や夢についてしっかりと書くことができていた。また、表紙や空いているスペースにペンなどで装飾を施している児童の姿も見られ、自分だけのポートフォリオを作るという児童の意欲を見ることができた。



【図4 児童のポートフォリオ】

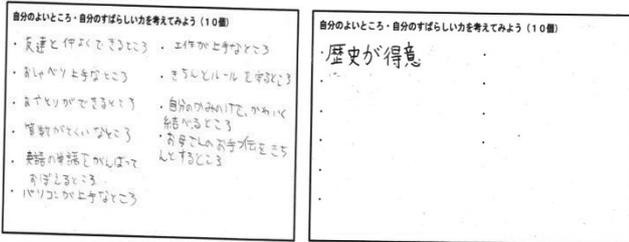
### 成果(○)と課題(●)

- 実物投影機などを活用し、活動をスムーズに進行することができた。
- 写真を載せたことで児童の興味関心を引くことができ、意欲的に活動している児童が多く見られた。
- 時間が足りず、ポートフォリオ自体に対する理解

が十分に得られなかった。

## ② 自分の良いところを考える

道徳の授業の後半で 10 分ほど時間をとり、本実践を行ったが、10 個以上書くことができている児童もいれば、1 個だけ、あるいは 1 個も書くことができない児童もいるなど個人差が非常に大きい結果となった。



【図 5(左) 自己肯定感の高い児童のワークシート】

【図 6(右) 自己肯定感の低い児童のワークシート】

【表 2 「自分の良いところを考える」の結果】

個数	0	1	2	3	4	5	6	7~
人数	4	9	4	5	4	2	0	6

## 成果(○)と課題(●)

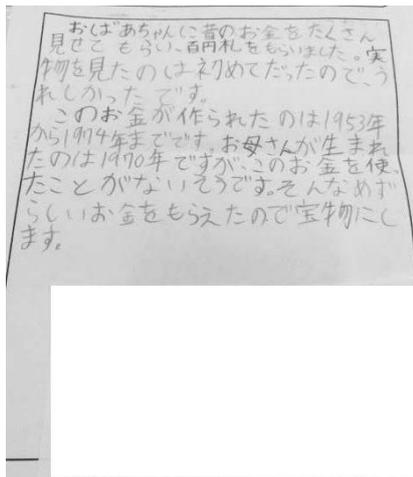
- 10 個という目標をもたせ活動に取り組みさせたことで、児童の意欲を引き出すことができた。
- 児童ごとの自己肯定感の現状を明確にすることができた。
- 道徳の資料の活用が不十分であり、「人間がもつすばらしい力」＝「自分の良いところ」と考えることができない児童が多く、自分の良いところを書く活動では手が止まってしまう児童の姿が目立った。

## ③ 自己紹介

自分の大切なものや好きなものを軸にして、自己紹介を行わせたこともあり、どの児童も非常に楽しそうに活動に取り組むことができていた。また、ワークシートのコメントでは、「自分のことを知ってもらえてよかった」「友だちのこれまで知らなかったことを知れてよかった」「もっとみんなのことを知りたいと思った。」などのコメントが書かれていた。

## 成果(○)と課題(●)

- 自己紹介に対して、付箋にコメントを書き渡すこ



【図 7 自己紹介のポर्टフォリオ】

とで自分の発表に対するフィードバックを行うことができていた。

- ワークシートに書かれていたように、自分の知ってもらえた喜びや、周りの人の良さを考えることの大切さを考えることの大切さに目を向けさせることができた。
- 自己紹介の原稿の作成に手間取ってしまう児童が多かった。書く内容を限定するなどの配慮が必要であった。
- 活動前の指示が曖昧であったため、司会進行を始めとした活動をスムーズに行うことができなかった。

## ④ 他己紹介ビンゴ

グループの他の人の良いところやすごいところなどを書いた用紙を本人に渡し、それを用いてビンゴゲームを行った。

児童のワークシートには「もっと周りの人の良いところを見つけない」「これをきっかけにたくさんの人と仲よくなりたい」「良いところを教えてもらえてうれしかった」といったコメントが見られた。



【図 8 他己紹介ビンゴの資料】

## 成果(○)と課題(●)

- 周囲の人から認められることで、自己肯定感をより効果的に高めることができた。
- ビンゴ形式にすることで、ゲーム感覚で楽しく活動を行うことができた。
- 他己紹介のシートの切り取りや貼り付けに時間

がかかりすぎてしまい、ビンゴの時間を短縮せざるを得なかった。

### ⑤ 自分の良いところを考える (2回目)

朝のSTの時間を使い、1回目と同じ10分間で自分の良いところを考える活動を行った。

書くことができた自分の良いところが1つだった児童が4人、2つが7人、3つが2人、4つが5人、5つが4人、6つが1人、7つ以上が10人であった。

【表3「自分の良いところを考える(2回目)」の結果】

個数	0	1	2	3	4	5	6	7~
人数	0	4	7	2	5	4	1	10

#### 成果(○)と課題(●)

- 児童によって個人差は見られたが、多くの児童は前回よりもより多く、より具体的に自分の良いところを見つけることができていた。
- 「他己紹介ビンゴ」の実践から1週間以上期間が空いてしまい、その間に野外学習をはさんでしまったため、児童によっては意欲や関心が低下していた。
- 書くことができていない児童に対する支援を十分に行うことができていなかった。

#### (7)実践のまとめ

##### 【成果】

【表4「自分の良いところを考える」の結果のまとめ】

個数	0	1	2	3	4	5	6	7~
人数 (1回目)	4	9	4	5	4	2	0	6
人数 (2回目)	0	4	7	2	5	4	1	10

児童の「自分の良いところを見つけよう」の記述内容の変化や各時間のワークシートのコメントから、活動を通し、新たな自分の良いところを発見することができたり、またすでに自分で分かっていた良さについても周囲の友だちから認められることでその良さについて強い自信をもつことができるようになったりしていた。

##### 【課題】

一定の成果は見ることができたが、ポートフォリオの実践としては、4間は短いものであるため、もっと長期的な実践計画を考えていく必要があった。そうした場合、授業の時間ばかりを使うことはできないため、朝のSTの時間や家庭学習の時間を効果的に活用していかなくてはならない。

また、家庭との連携を十分に行うことができていなかったことも課題であった。周囲の友だちから認められることでも、十分自己肯定感を高めることができたが、子どもたちにとって一番信頼できる身近な人は親であえると思われる。親に子どもが頑張っているところ

ろやすごいところなどを手紙などで、文章で書いてもらうことでさらなる効果が期待できたと考えられる。

## 2 教師力向上実習Ⅱ

### (1) 実習のテーマ

書く力を高め、学びを実感する授業づくり  
～一枚ポートフォリオ評価の活用を通して～

### (2) テーマ設定の理由・目指す児童像

5月に行った教師力向上実習Ⅰでは学活の時間を利用して、自分自身のこれまでを振り返る活動や、自分自身の大切なものをまとめる活動を行うことで、それぞれがもつ「すばらしい力」に気付き、自己肯定感を高めることを目標とした実習を行った。また、実習の後半には、他己紹介の活動を通して、自分自身の「すばらしい力」だけでなく、クラスの周りの児童の持つ「すばらしい力」にも目を向けることができるようになった児童の姿が見られた。また、児童によって書く力に大きな差があるということを知ることができた。

教師力向上実習Ⅱでは、実習Ⅰとは異なり、教科活動の時間を通して、児童の自己肯定感を高めることを目的として上記のテーマを設定した。教科活動の時間で、ひとつの単元を通して、何を学ぶことができたのか、学習前と学習後で、どのような変化があったかなど、自分自身の学びや成長に気付くことができる児童の育成を目指すと共に、書く力を高める実践を行った。

### (3) 手立て

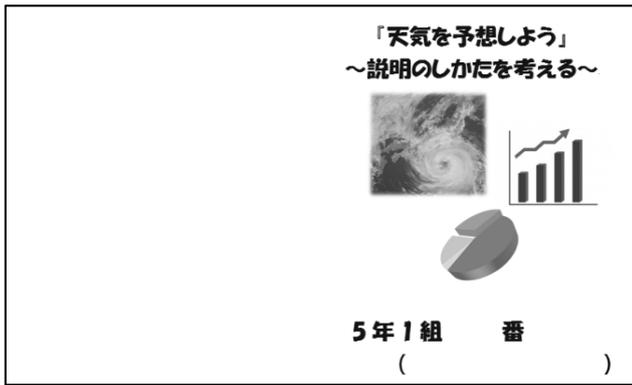
本実習では、書く力と自己肯定感の向上のため、それぞれ以下の手立てによる実践を行っていく。

#### <自己肯定感を高める手立て>

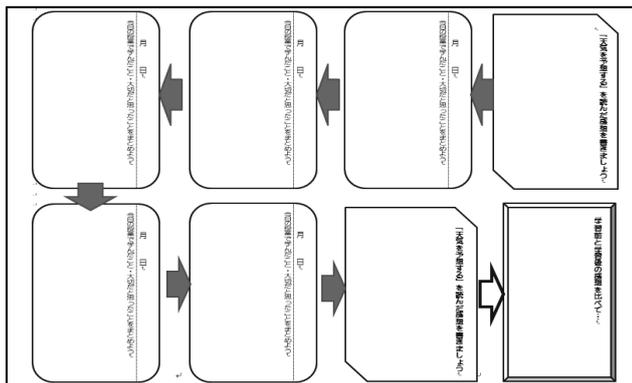
##### 手立て① 一枚ポートフォリオ評価(毎時間)

本実習で作成・使用したポートフォリオはB4より一回り小さいものであり、『天気を予想する』の初発の感想(診断的評価)と授業ごとの学びの振り返り(形成的評価)、学習した内容を踏まえての『天気を予想する』の感想及び初発の感想からの変化(総括的評価)を書く欄を設ける。

授業においては、授業の最後の5分間を使い、ポートフォリオに書き込む時間を設け、継続的な自己評価や、学習のまとめを行うことができるようにしていく。



【図9 ポートフォリオ 表紙】



【図10 ポートフォリオ 裏面】

**実践のねらい**

単元を通した、一枚のシートを完成させることを目的とすることで、学習に対する意欲の向上や完成したときの達成感をもたせる。

授業の終わりに、ポートフォリオによる継続的な自己評価と学習のまとめを行うことで、単元を通した学習の履歴とし、学習による自身の変容を分かりやすく示す。そして、ポートフォリオの振り返りを行うことで、自己の変容を意識させ、成長を実感させることで自信をもたせ、自己肯定感を高めていく。

**<書く力を高める手立て>**

**手立て② 定型文の活用**

書く力が低い児童への支援を行うため、『天気を予想する』のまとめを行うために定型文を提示した。[私は『天気を予想する』を読んで、はじめは( )と感じたが、くわしく読んでいくことで( )ということに気づくことができた。...]といったように、自分の考える部分を空欄で示したフラッシュカードを児童が作業を始めた数分後に掲示する。

**実践のねらい**

書く活動が進んでいない児童によくある傾向として、書き出しが決まらず悩み続けてしまうという姿がよく見られていた。感想や自分の考えを書く際には、書き出しよりも、話の中身の方が大切であることが多いため、児童の苦手とする書き出しを定型文という形で提

示することで、より多くの児童が、文章の中身の部分を考える段階に進むことができることを目指す。

**(4) 実践の流れ**

本実習では、以上の2つの手立ての実践のため、単元「天気を予想する」「グラフや表を引用して書こう」を扱ったような指導計画の基、授業実践を行った。全10時間の単元であるが、研究テーマである一枚ポートフォリオ評価については、「天気を予想する」の6時間の授業で扱った。

【表5 教師力向上実習Ⅱの指導計画】

時	学習内容	ねらい
1	○ 本文を読み、初発の感想を書き込む ○ 学習計画を立てる ○ 説明の工夫を読み取る① ・第一段落の説明の工夫を考える。	自己理解
2	○ 説明の工夫を読み取る② ・文章の構成を考える ・文章中の間を見つけ、その答えとの関連性を考え、説明の工夫に気付く。	自己理解
3	○ 説明の工夫を考える ・絵や図などの資料と、それに対応する文章を探し、資料を使った意図やその効果を考える。	自己理解 他者理解
4	○ 筆者のまとめについて考える ・筆者の書いた「まとめ」の構成について考える。 ・筆者の伝えなかったこと(要旨)を300字以内でまとめる。	自己理解 他者理解
5	○ 学習の振り返りをする。 ・再び本文を読み、初発の感想との違いをまとめる。	自己理解 自己受容
6	○ 「言葉」の学習をする。 ・語と語のまとまりを考える。	

**(5) 児童の様子及び成果と課題**

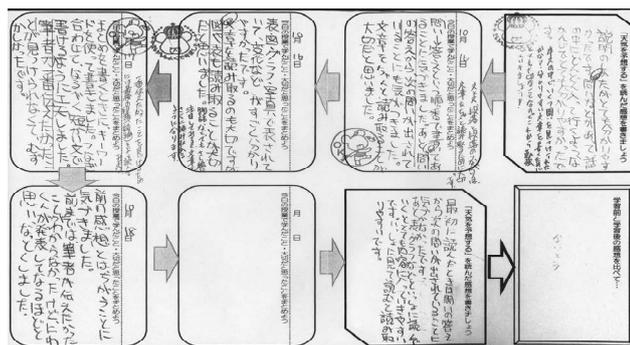
**<自己肯定感を高める手立て>**

**① 一枚ポートフォリオ評価**

児童はポートフォリオを使った実践をこれまで行ったことがなかったため、ポートフォリオの活用には戸惑いながらも、単元を通して意欲的に取り組むことができていた。児童のポートフォリオの感想としては、「勉強した内容を分かりやすく振り返ることができた。」などのコメントが見られた。

また、後半の単元である『グラフや表を引用して書こう』では、作成したポートフォリオの内容を自ら振り返り、学んだことを次の学習に生かしていこうとす

る姿が見られた。



【図 11 児童のポートフォリオ】

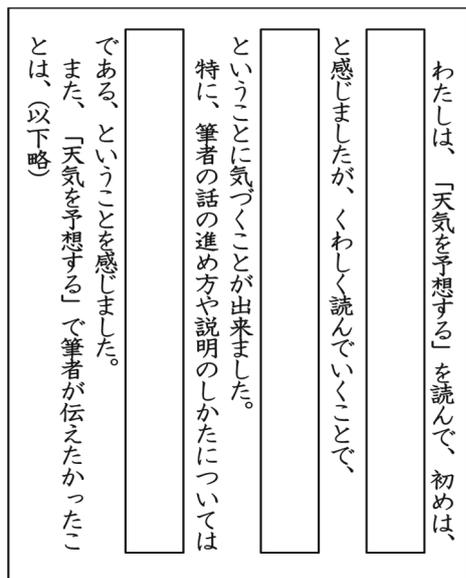
### 成果(○)と課題(●)

- 毎時間の「今日の授業で学んだこと・大切だと思ったことをまとめよう」という設問を用いたことで、児童の幅広い表現を引き出すことができた。
- ポートフォリオを振り返り、単元の学習前後の変化に気付くことができた児童が多く見られた。
- 次の単元の学習にポートフォリオを生かすことができている児童が多かった。
- 設問が「今日の授業で学んだこと・大切だと思ったことをまとめよう」という漠然としたものであったため、書くことが苦手な児童は戸惑っていた。
- 全く書くことができていない児童もあり、ポートフォリオを自己の振り返りの道具として活用することができていなかった。

#### <書く力を高める手立て>

### ② 定型文の活用

第5時の再び本文を読み、初発の感想との違いをまとめる活動において、定型文の活用を取り入れたが、これまで書くことが苦手で、ポートフォリオにもあまり上手く自分の言葉で表現することができていなかった児童でも、定型文で示した内容を参考にして、書き進めることができていた。



【図 12 授業で使用した定型文】

### 成果(○)と課題(●)

- 書くことが苦手な児童でも、定型文を参考にしながら、自分の考えを書くことができていた。
- 書ききることを経験させることで、書く活動に対する苦手意識を薄めることができた。
- 定型文に合わせすぎてしまい、自分の言葉で書くことができていなかった児童も見られた。
- 定型文の内容が適当であったかの推敲を十分に行うことができていなかった。

### (6) 実践のまとめ

#### 【成果】

児童にとっては慣れないポートフォリオの活用であったが、教師が用意した振り返りの時間以外でも自主的に自分がまとめた内容を振り返り、次の学習の内容に効果的に活用することができていた児童も多く見られ、自己評価及び学習のまとめをする手立てとして有効であるということを知ることができた。

#### 【課題】

ポートフォリオを自己肯定感と評価の両面から本格的に実践していくためには、ある程度児童に書く力が備わっている状態であることが好ましいということが分かった。より効果的にポートフォリオの実践を行っていくためにも、書く力の底上げを行い、自己肯定感を高めるための土台作りが必要であった。

ポートフォリオの内容としては、定型文を示すことなどが、書く力の低い児童にとって効果的な支援であるということは本実践を通して知ることができたため、一枚ポートフォリオにおいても、漠然とした設問ではなく、定型文やキーワードなどの支援を用意しておくことで、より自己肯定感を高めていくことができると考えられる。

また、本実践では、書く力のある児童が、書くことが苦手な児童用の支援に合わせて自分の言葉で書くことができていなかった姿が見られた。既に十分な力をもっている児童に対する支援についても用意をし、挑戦させることで、上位の児童の意欲や自信を高めていく必要があったと考えられる。

### 3 教師力向上実習Ⅲ

#### (1) 実習のテーマ

教師力向上実習Ⅲでは、知多市立K小学校の6年生で実習をさせて頂いた。2週間という短い実習であったが、本実習では、実習Ⅰ・Ⅱの課題から次のテーマを設定し実践を行った。

児童の書く力を高める授業づくり

#### (2) テーマ設定の理由

実習Ⅰで行ったパーソナルポートフォリオによる学

級活動における実践、実習Ⅱで行った一枚ポートフォリオによる教科活動における実践、それぞれ一定の成果を見ることはできたが、児童によって表現力や書く力の差が非常に大きく、それは特に実習Ⅱで行った教科活動での実践で顕著に見られた。

実習校であるK小学校の児童の様子を書く力に注目して観察してみると、やはり書く力の差は大きく、また、自分のことや自分の考えを書く時間でも、周囲の児童がどのようなことを書いているのかを気にしている児童が多く、自分の考えた内容について自信をもつことができている姿が目立った。

本実習では本実習では、書くことが苦手な児童に目を向けた教材研究や授業計画を考え、意欲的に授業に参加し、書く力を高めることができる授業づくりを考えることを課題としていきたい。また、すでに書く力が高い児童に対しては、自分の言葉で表現することができるような手立てを行っていきたい。

**(3) 実践内容**

**手立て① ワークシートの工夫**

文章作成の際に使用するワークシートに定型文や書き方のポイントを書いたものを使用することで書くことが苦手な児童に対する支援を行う。また、単元を通してワークシートの形式をできるかぎり固定したものを使用する。

通常のワークシートのほかに、書く力の高い児童用の発展的な内容のワークシートを用意する。

**実践のねらい**

書くことが苦手な児童に対して、定型文や書く内容についてのポイントを示すことが効果的であるということは、教師力向上実習Ⅱの国語の実践を通して感じることができた。教師力向上実習Ⅱでは、授業のごく一部でしか、そういった手立てを取り入れることができていなかったため、本実習では単元を通してどんな児童でも書くことができるような授業の展開を考えていくことで、継続的な児童の変化を観察する。

**手立て② 習得活用の授業構成**

文章を書く活動を習得と活用に分け、前時までで学習した内容を生かして取り組む時間を設けた。また、習得と活用の内容に関しては扱う素材の違い以外ではできる限り同じ形式で行う。

**実践のねらい**

学習内容を習得と活用に分け、学習した内容を使った活用の機会を用意することで、学んだ内容の確実な定着や自分自身の力がついてきているということを実感させていく。

**(4) 実践の流れ**

以上の2つの手立ての実践のため、本実習では、第6学年国語科の単元「読み取ったことや感じたことを表現しよう」を扱い、次のような指導計画の基、実践

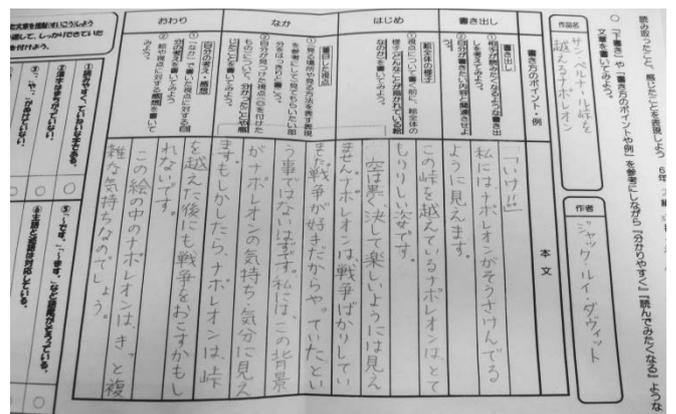
を行った。

**【表6 教師力向上実習Ⅲの指導計画】**

時	学習内容	ねらい
1	○ 「風神雷神図」から読み取ったことを表現し発表する。	
2	○ 読み取ったことを伝えるための効果的な表現の工夫を考える	
3	○ 絵から読み取ったことを文章にまとめる。 ○ 交流活動(回し読み)	他者理解 自己理解
4	○ 好きな絵を選択し、紹介文を作る。	
5	○ 書いたものを読み合い、視点や表現のよさを伝え合う。	他者理解 自己受容

**(5) 児童の様子及び成果(○)と課題(●)**

**① ワークシートの工夫**



**【図13 授業で使用したワークシート】**

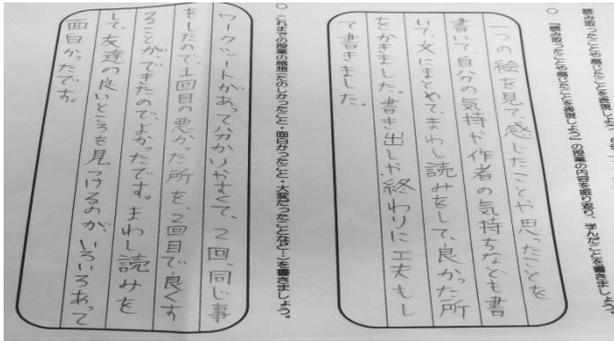
文章を「書き出し」「はじめ」「なか」「おわり」の4つの構成に分けることに加えて、それぞれの構成における書き方のポイントや例を示すことで、書くことが苦手な児童でも書き進めることができていた。最終的には全ての児童が文章を完成させることができた。

また、書く力の高い児童への支援として、「なか」を「なか1」「なか2」に分けた難易度の高いワークシートを用意したが、数名の児童はそれに対し意欲的に取り組むことができていた。

**成果(○)と課題(●)**

- 同じ形式のワークシートを継続して使用したことで、授業を行うごとに書くことに慣れていった。
- 難易度の高いワークシートを用意することで、時間を持って余す児童は見られなかった。
- 書き方のポイントに従って、文章を書くことができていた。
- 書き終えた文章に対する推敲を十分に理解させることができていなかった。

## ② 習得と活用の授業構成



【図 14 授業の振り返りのワークシート】

授業を振り返るワークシートには、「これまでは作文が苦手だったけど、今回たくさん書く練習をして、文章の書き方が少しわかった。」や「1回目の悪かったところを2回目で直すことができました。」などが見られた。

### 成果(○)と課題(●)

- 繰り返し同様の活動を行うことで、力の定着を実感することができていた。
- 1回目と2回目の違いを十分に理解せずに活動に取り組んでいる児童も見られた。

### (6)実践のまとめ

#### 【成果】

習得と活用を行うことで、作文単元における児童の書く活動の時間を増やすだけでなく、習得部分で活用した内容の確実な定着、そして児童自身にその定着した力を実感させることができていた。

#### 【課題】

書く活動を重視したため、児童同士の交流の機会をあまり多くとることができていなかった。他の児童の作品に触れ「他者理解」を行ったり、良かったと思う部分を伝え合う活動を行ったりすることで、さらに自信をもって活動に取り組むことができていたと考えられる。

## VI 本研究のまとめ

ポートフォリオを軸とした実践を通して、ポートフォリオを行い、自分自身を見つめ直したり、自身の成長を実感したりする活動を通し、自己肯定感を高めていくことができた。特に、自分自身を見つめ直すという点においては、ポートフォリオの「綴る」という性質と非常に親和性が高く、長期的・継続的に行っていくことでさらなる成果が期待される。

一方で、教科活動において自分自身の成長を実感する活動においては、児童の「書く力」という大きな課題が見られた。その「書く力」に関しては、教師力向上実習Ⅲを通して、定型文の活用や習得活用の授業形態を行うことで、補っていくことができるという学ぶことができたため、一枚ポートフォリオ評価においても、毎回の自己評価の際の設問を具体的なものにすることでどのような児童でも書くことができるような支援を行い、児童が書く力を高め、ポートフォリオとい

う形に慣れていくにしたがって、設問の内容を漠然としたものに変えていき徐々に児童の自由な表現を引き出していく。そのようにして、段階を踏んでいくことで、書くことが苦手な児童を含めたより多くの児童がその効果を実感させることができるものであると考えられる。

## VII おわりに

教職大学院での3年間の学習を通して、様々な理論を学び、その学びを多くの実践に結び付けていくことで、理論と実践の両面から非常にたくさんのことを学び、身につけることができた。これから教育現場に入ってから、学ぶ姿勢をもち続け、教職に取り組んでいける教師でありたい。

本研究ではポートフォリオを中心とした実践を行ったが、そのいずれも4週間というポートフォリオとしては比較的短い期間での実践であった。ポートフォリオは積み重ねたものが多いほど、振り返った際により多くのものを得ることができるものであるため、今後の課題としては、学期や年間を通したより長期的な視点でポートフォリオの実践を行っていきたい。また、ポートフォリオを中心とした授業構成や単元構成についても工夫の余地は多く見られた。そのような、授業全体の構成との関連性も含めて、ポートフォリオの関する研究を今後も深めていきたい。

#### 【引用文献】

- 1) 田中道弘『Rosenbergの自尊心尺度をめぐる問題と自己肯定感尺度の作成と項目の検討』 常盤大学博士學位論文 2008年 p.36
- 2) 岩堀深雪『心がぐん!と育つパーソナルポートフォリオ 効果抜群!誰でも「未来への贈り物」』 東洋館出版 2003年 p.8
- 3) 堀哲夫『子供の成長が見える一枚ポートフォリオ評価 小学校編』 日本標準 2006年 p.8

#### 【主な参考文献】

- 1 文部科学省資料
  - ・『小学校学習指導要領』 文部科学省 2008年
  - ・『小学校学習指導要領解説 国語編』 文部科学省 2008年
  - ・『小学校学習指導要領解説 道徳編』 文部科学省 2008年
- 2 自己肯定感に関する資料
  - ・古辻純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』 光文社新書 2009年
  - ・高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』 新日本出版 2004年
- 3 ポートフォリオに関する資料
  - ・西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法 新たな評価基準の創出に向けて』 図書文化 2003年
  - ・鈴木敏恵『自分発見ポートフォリオ解説書』 教育同人社 2003年

#### 【付記】

大学院の3年間の実習では、多くの先生方にお忙しい中温かいご指導・ご助言を頂きました。とりわけ、学校サポーターや教師力向上実習では、連携協力校の校長先生や指導教諭の先生方に大変お世話になりました。お世話になったすべての先生方から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、学校サポーターや教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書作成にあたって継続的にご指導くださったすべての先生方に感謝申し上げます。